

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十三年四月一日発行(毎月一回一日発行)  
第十七卷第十二号(通卷第二〇四号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第 204号

4. 2011

鈴さやぐ

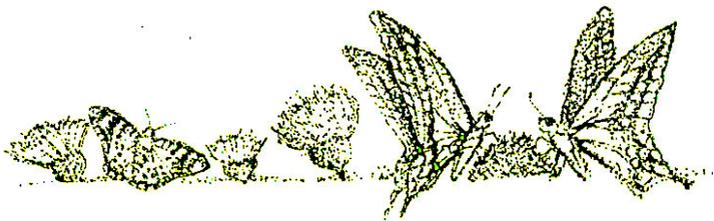
品川 鈴子

除幕綱花アカシヤの鈴さやぐ

兄の句碑浅蜷を掘りし浜の辺に

青葉潮碑の碧石も波の紋

干潟より眺めて兄の癖字の碑



兄の碑の文字は遊びし磯に向き  
遠<sup>おち</sup>近<sup>こち</sup>に桐咲く父祖の山に句碑  
目に留めて句碑の台座の草を抜く  
胃間へて夢も毛虫の蠢ける  
浜豌豆実家の姓の多きこと  
褒められて鈴蘭掘れど根に負ける



# 第十五回ぐるっけ賞発表

受賞二名

俳句の部

第一席 「夏 薊」

金子 清孝

第二席 「好砒菌」

田中 佳子

露の臺採取禁止の札のあり  
曲芸も身につけてゐる剪定師  
えごの花落ちて路上の星となる  
この道のずつと先まで夏薊  
投票はいつも日曜百日紅  
それ程に強さうもなし弁慶草  
着払ひにて無事戻る冬帽子

臘月の抹茶一服御院主と  
まちがえて船乗り替える冬の蝶  
後座に入る合図呑み込む雪解水  
芳ばしき茶の葉焙じる春隣り  
西行も踏み入りし山蕨摘む  
売地尚狗尾草と雀統べ  
好砒菌ゐる星ありて天高し

# 玉鈴

岡山 瀬口ゆみ子

籬声の活気更なる鯉起し  
身震ひをすれば全山雪垂る  
能面の冴えて飾らる宿の廊  
花八手肩の力を抜けといふ  
星数の多き故郷除夜の鐘

兵庫 高橋 大三

誕生のポイント稼ぎ寒風へ  
下り坂ペダル踏む児を北風きたが押す  
九十九折直登すれば息白し  
寒椿宇治では「ゲンジツバキ」とぞ  
丘一面油菜光り旨さうに

大阪 竹下 昭子

撓るだけ笹しならせて福男  
福笹を持たされて夫黙然と  
福男の側にはでんと山の神  
福笹は過分なる夢背負わされ  
大寒の空へ煙草の煙吐く

# 吟

大阪 武田ともこ

冬帽子土産物屋に忘れ来し  
対向車待つホームにも斑雪  
いま晴れてすぐ吹雪き初む但馬海  
放たれし鳥もどるらし雪しまき  
播但線木々は黙して雪衣

愛媛 武智 恭子

吾が庭の手水の鉢に氷柱垂る  
初宮参り親子防寒衣深く被て  
早朝の通学児童息白し  
梅蕾徒長枝の先に鈴なりに  
水仙が朝日を浴びて咲き初む

大阪 谷 泰子

御向ひも鉄扉に吊るす注連飾り  
御降りを衝いて駆伝疾走す  
漆黒に葉師三尊御身拭  
通院の道の先々枯葉舞ふ  
マフラーに口まで埋め立話

兵庫 恒成久美子

素囃子の響きに始む初狂言  
元日に嫁よりもらふ卯の張子  
背丈また伸びし男の子よ屠蘇祝ふ  
年玉で右手グローブ買うてくる  
ひとり聴く録画のニューイヤークンサート

大阪 角谷美恵子

鳥取に冬のオアシス宙の色  
思はずに雪のぬかるみ直登す  
馬の背にさへぎられたる寒怒濤  
雪雲の淡く垂る先船の影  
雪付きし馬の背に向く砂と風

愛媛 年森 恭子

庭先でまたも集会初雀  
再任の決定したり橙酢  
親業の区切り末子の成人式  
ぐい呑みはひとつ熱燭分けあへる  
負ひし子の眠りて重き枯野道

兵庫 内藤 三男

乗換への駅のベンチの日向ぼこ  
翳れば明かりとなりし木守柿  
何時起きていつ寝る母や根深汁  
総力をあげて公孫樹の散る日かな  
熱燭のあとの寂しさ如何せん

兵庫 中尾 廣美

だまり一つづつ訪ふ初鳥  
どんど焼あだこうだと火つけ役  
北風走り去る子のはづむ息  
裸木の谷底行けり紀州路線  
立ち話降りくる雪に遮られ

大阪 中島 霞

袖風呂の子の手にはじけ袖一果  
年越しの茅の輪にほつれ二た三すじ  
若菜摘む四囲の山脈晴れわたり  
薺打ち夫も手伝ふ襷掛け  
手を揚ぐや小走りに来る毛糸帽

兵庫 中島 節子

汲置のバケツ底まで凍りたり  
人気なき砲台跡に野水仙  
煉瓦積アーチ連なり返返る  
やうやくに胎内巡り着膨れて  
白梅の奥に筆塚天神社

大阪 中田 寿子

故郷は同じ四国や味噌雑煮  
嫁ぎ来て出来ぬひとつは寝正月  
反橋は眺めるだけの初詣  
レトルトの七草粥も店先に  
寒梅や盆栽にまず大輪が

神奈川 永塚 尚代

学生街サンタの列の行進す  
気にかかる隣の事情去年今年  
相棒のしわの増えしや去年今年  
住み古りて家の中まで着脹れる  
毛糸編み女の知恵の浅からず

大阪 野口喜久子

寒暁に覚めて地震の刻今も  
寒椿蕾は色を握りしめ  
往生の至急回覧松の内  
百羽より一羽が恐き寒鴉  
忘ることあれども喜寿の日記買ふ

兵庫 蓮尾みどり

金輪際染めぬと決めた木の葉髪  
晩年の母と向き合う初鏡  
受験子に追込みかかる塾通い  
降雪の予報下模試へペダル踏む  
スカイツリー正面に据え大試験

兵庫 長谷川 鮎

音楽に乗りて絵を画く春広場  
見渡せる長崎鼻にきんぎよ草  
尺八を遺し 出撃桜冷え  
三角舎知覧の桜三分咲  
廃校の張り幕古りて大桜

兵庫 林 哲夫

謡ひ納めたつた三人声を張る  
列遅々と鳥居の外で初詣  
初日記父の書体を真似てみる  
成人式孫の着付にかゝりきり  
もと恩師会へば辛口海鼠好き

兵庫 林 美智

若いとのお世辞まにうけ初鏡  
雪達磨最敬礼でなほも立つ  
旧友に誘はれ映画女正月  
焼牡蠣を剥いて女将はつぎつぎに  
引き寄せて酔海鼠に箸そつと添へ

愛媛 福島 松子

ハイヒール音響かせて初仕事  
大まかな塩梅伝はり雑煮椀  
ぶつきらばう男親子の初電話  
神主の火打合図にどんどの火  
足早な夫の背追ひて初詣

愛媛 福田かよ子

みどり児の眠る児泣く児初太鼓  
涛の色刻々変へて初日出  
頬かむり犬にもさせてゆく遍路  
冬怒濤津軽弁にて押し寄せる  
医療ミスありし児歩む小春の日

# 鈴の奏

品川鈴子選

木の桶に氷柱のかけら山の湯屋  
兵庫 吉田 耕人

薄氷の石白底に動くもの

天領の湯宿庭石にも淑気

苞重し天領日田の今年酒

鞭の指で意固地に機結び  
愛媛 羽生きよみ

切炭をお洒落包みに違ひ棚

ライバルの影踏み踏まれ初マラソン

物置に姑遺せし炭一俵  
福井 木曾 鈴子

丹頂鶴頂ける丹の真ん丸に

池底に押競寒鯉隙間なく

眠気とぶ不意の轟音鯉起し

鯉起し突如恩師の雄叫びと

一病癒え又一病寒に入る  
兵庫 先山 実子

冬の鳥鈴なりキウイ啄まず

小正月ぜんざい振舞う美容院

殻付き牡蠣鍋小さくて持てあます

カレンダー書き込み多き去年今年  
兵庫 福島 悠紀

門松のそぎ切り鋭き天を突く

経机手作り敷物飾餅

欄干の西向横隊ゆりかもめ

兄貴ぶり独楽掌に受けて見せ  
兵庫 松村 晋

走り込む野球少年暮早し

厩舎出る男も馬も息白し

風花の少女に添ひて盲導犬  
愛媛 濱田ヒチエ

初電話代わり番こに弾む声

箱根路の走者転ばす凍てし道

青竹の櫓を組みてどんど待つ

新年のテーマは赤と絵画展

釘一本幾年支ふ注連飾  
兵庫 西田 敏之

犬逝きてそこが空白寒茜

寒鴉墓地をいざやと群れにけり

賀状受く追ひて電話の添へられて

諍ひて無言障子の内と外  
兵庫 上田 雪夫

冬耕の人にひと声車椅子

冬うらら猫の抜き足鈴が鳴る

鴨の陣池の囲はりを人走る

山頂へ休みくゝの雑煮腹

ホースより氷飛び出す畑の朝

ホテル膳卒寿の父のお年玉

暮早し好手妙手の将棋盤

推敲に風花時空さ迷へり

竹の節天に弾けて小正月

松過ぎのPETカプセルジャズ流る

七福神みんなで風呂に浸りたし

行員の寿退社冬いちご

賀状の卵片耳垂るも福々し

被布脱がぬ意地つ張り子膝で抱く

神樟に千木輝きて初恵比須

寝られざる赤きヘルベス年を越す

蘇れ麻痺の神経春を待つ

倒れこみ救急車待つ雪の道

いとこ煮の冬至南瓜ダイケアに

山眠り畑もねむり鳥啼く

凍土は巖の如く鍬寄せぬ

地下街に雀身を寄す寒さかな

兵庫 中村 絃

兵庫 仲田 眞輔

兵庫 磯田せい子

兵庫 長谷川としゑ

兵庫 吉本 淳

冬木の芽真紅の鎧纏ひけり

病状も賀詞に加へる病み上がり

「ゆつくりと」磴の張り紙初不動

腰痛の予防に煙初不動

白壁に動く影絵は枝垂れ梅

病む友の声に張りあり年の暮

あわたゞし掃除買物年の暮れ

降る雪に雪の南極なつかしく

引越してモノレールなる初電車

こだはりて探し探せし日記買ふ

年の暮主に優る電動機

羽子突きも独楽も見かけず筑紫へ

救急車乗るは私よ冬の闇

甦る吾を囲むや春陽射

虎落笛送電塔の逞しき

山芋を猪食い荒す夜な夜なに

猪垣の通電確かめ山下る

手袋のまま指切り停留所

指の傷隠す手袋母の前

新築の屋根に連雀初日浴ぶ

福豆を食べて吾に栖む鬼は外

東京 堤 節子

鹿児島 原田 圭子

福岡 山口 博通

大西ユリ子

沖 則文

城下 明美

秀  
鈴  
記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句 十五句 佐方 明遊 〃

\*選句は全て 品川鈴子

鮒起し突如恩師の雄叫びと  
木曾 鈴子

苞重し天領日田の今年酒  
吉田 耕人

昔から天子様や幕府のお抱え領地は、豊かな経済的基盤があり、優れた産物も多い。大分県日田市は水質に恵まれて酒処として知られる。たまたま旅の途中でその新酒にでくわして、何よりの土産と買い込んだ。酒好きならどんなに重くても苦にしないで、その重さがむしろ嬉しい。

物置に姑遺せし炭一俵  
羽生きよみ

ずっと一緒に暮らした姑が、物置の隅にそつと炭俵を一俵遺してくれていた。総電化の今では手に入り難い代物で、姑と嫁が久々に再会したここち。女手で戦後を乗り切った姑は、大家族の必需品を周到に備蓄したのだろう。物静かで角張らず、温かさを裡に潜め、炭のようなやんわりした人柄だった。懐かしさに切炭を紙包みにして違い棚に手向ける。

十二月から一月頃の鮒が定置網に掛かる漁期に鳴る雷を鮒起しと呼ぶ。寒冷前線が通過すると発生する雷に「鮒が上がる」と北陸や佐渡や相模の漁師が言い習わしてきた。深夜の轟音に、ふと戦時中の軍事教練の師範が叫ぶ気合かと驚いて目覚める。怖かったが今ではなつかしい声。

一病癒え又も一病寒に入る  
先山 実子

一病が治りやれやれと思つて正月を迎えられたのでしようか。安心したところにまた違う病気が出てしまった。丁度寒の入りあたり、年で一番寒い時期をどう乗り切ろうかと案じられたのですが、客観的に一句にされているので、重い病気ではないのではと推測しました。今年の一月は特に寒かったので、早く良くなられるといいですね。

カレンダー書き込み多き去年今年  
福島 悠紀

大晦日に今年のカレンダーを捨て、新年のカレンダーに

換えられた。今年も忙しく過ごされたのに、新年のカレンダーにはや予定が色々書き込んである。ご自分の忙しさに少し呆れながら、元気を誇りにも思っついていらっしやる様子が良く分かります。作者は私よりも年上のご様子なので、見習いたいものです。

厩舎出る男も馬も息白し

松村 晋

テレビで競馬を見ると、馬を走らせる訓練は早朝に行うようです。この旬の厩舎は乗馬クラブかと思いますが、同じように朝早くに訓練をするでしょう。調教員が馬を厩舎から引き出すところに出会われた。「息白し」の措辞で、厳しい寒さの朝にこれから訓練を行う緊迫感を上手く表現されました。

初電話代わり番こに弾む声

濱田ヒチエ

離れて住んでおられる子供さんからの初電話があり、大人の新年の挨拶が交わされた。その後、おばあちゃんと話したいお孫さんが次々と電話に出て楽しい話を聞かれたことでしょう。仲の良いご家族の楽しいお正月の様子がよく分かる楽しい句です。

犬逝きてそこが空白寒茜

西田 敏之

愛犬が老齢となり亡くなった。犬小屋を片付けられたのでしょう。その空白を見る度、作者は心に大きな空白を感じておられる。寒の夕焼けが照らすとき寂しさの中に、少しの明るさを感じられたのではないのでしょうか。

冬うらら猫の抜き足鈴が鳴る

上田 雪夫

冬の暖かい日、猫が何かを狙ってそろっと近づこうとしている。猫の首には鈴が付けられているので、抜き足で歩いても鈴の音が響く。獲物は鈴の音に気付き逃げてしまう。作者はその場面を観察し、ユーモアのある句に仕立てられた。

ホテル膳卒寿の父のお年玉

中村 紘

卒寿のお父様を囲み、ホテルで正月の祝い膳の用意が整った。さあ頂こうと言う時、お父様から子、孫、曾孫全員にお年玉が渡された。作者は驚かれるとともに、いくつになっても子供たちのことを思っておられるお父様にいつもまでも元気でいて欲しいと思われた。